

フィクション劇場 第六話「矢面」



フィクション劇場（セレクト）  
第六話  
「矢面」  
大太 大

【はじめに】

○「フィクション劇場」作者の大太 大（お  
おた・だい）と申します。つたない作品  
にご興味を持って頂き、ありがとうございます  
います。

【フィクション劇場とは】

○作者が世の中で違和感を感じている事や疑問に思っていることなどに対して、「もし、こういう設定や条件になったら、当事者たちはどう動くのか」を考えたオムニバスドラマです。フィルム・バイヤーさんではドラマ部門に全二十五話をまとめて公開しており、それと同様に完全著作権フリーですので、詳細はそちらをご覧ください。マスメディアに少々風が向いている「性根の曲がった社会派ドラマ」で、この第六話はその中なら、作者が是非読んで欲しい脚本をセレクトした話になります。では本編をどうぞ。

フィクション劇場 第六話「矢面」

【登場人物】

佐藤 真（さとう・まこと）（39）：東京都

牛崎市市長。パワハラ疑惑にさらされる

飯山 光吉（いいやま・みつよし）（56）：

同企画部部长。パワハラ告発者

山川（やまかわ）（53）：宅配運転手。

宮原（みやはら）（61）：ワイドショー 司

会者

澤田（さわだ）（28）：ワイドショー アシ

スタント

平木（ひらき）（37）：ワイドショー 現地

レポーター

小田島（おだじま）（66）：ワイドショー コ

メンテーター

司会（46）：佐藤市長の記者会見司会者

後藤（ごとう）（33）：記者 佐藤を遮る

麦林（むぎばやし）（34）：毎朝新聞 女性

フィクション劇場 第六話「矢面」

記者

立石（たていし）（31）：大日本テレビ記者

大友（おおとも）（45）：日刊アルプス記者

藤野（ふじの）（44）：共同プレス記者

日野（ひの）（35）：SBS首都圏テレビ記

者

横山 一郎（よこやま・いちろう）（68）：

フリーの記者

田島（たじま）：佐藤の主治医

看護師3名

警察官A、B

警察署長：記者会見対応

公用車の運転手

秘書

新聞読者

記者多数

【あらすじ】

東京都牛崎市・企画部長の飯山光吉が、同市市長の佐藤真のパワハラ行為を告発し、姿を消す。佐藤は、まずは飯山との認識合わせの必要性を強調する。

しかし、警察の搜索で、山中で飯山の靴だけが発見されるに至り、記者たちの佐藤への追求が激しくなる。

佐藤は記者への対応を続けるが、ストレス性の急性心不全を発症し、入院する。しかし、他の職員への影響を考えると、詳細は伏せため、返って記者から疑問を持たれる。

不調を押してストレッチャーで会場に現れた佐藤は、記者の取材姿勢に疑問を呈し、自分にもしものことがあったら誰が責任を取るのかと問いかける。

その後、飯山が無事に保護されたが、記者たちは飯山に佐藤の不調の責任を正す。

2ヶ月後、佐藤の名前が新聞のおくやみ欄に、顔写真もなく掲載される。

○真っ直ぐな道路（宅配…夕方）

宅配の運転手の山川が、4トントラックを走らせている。

人気のない真っ直ぐな道。周辺は森。

山川「…ったく、オレの担当エリアは2つに分かれちゃってるから、面倒臭いんだよね。向こうで配ったら終わりなんだけど、日も暮れて来たし。今日中に配達しないとうるさいから、さっさとやらないと。ホント外資は人使いが荒いわ」

対向車線にハザードランプを付けた車が路肩に止まっている。

山川は横目で見るが、そのまま通り過ぎる。

× × ×

夜、山川が運転しているトラックが、対向車線から戻ってくる。

山川「ふう…、今日はおしまいっと。

さっさと家帰って、酒飲むか」

同じ場所に、ハザードを付けた車がま

だ止まっている。

山川「あの車、まだいるのか？　ずっとハザード点けっぱなしだったら、バッテリーが上がっちゃうぞ。運ちゃんに教えとくか」

山川は、その車の後にトラックを止める。

ヘッドライトに照らされたナンバープレートに「わ」の文字。

山川「レンタカーか……。だったら余計に、だな」

山川は車を降り、中を覗き込む。

山川「誰もいないな……」

山川は運転席に、一通の封筒を見つけ  
る。

封筒には「佐藤真市長のパワハラを告発する。身の危険を感じるので、探さないで下さい」と書いてある。

山川「!?　こりゃ、ヤバいな。警察に連絡しない」と

山川は、その場で110番通報をする。

山川「もしもし、警察ですか？ 乗り捨ててあったレンタカーに変な封筒が置いてありまして。はい。場所は…」

× × ×

パトカーが到着する。

警察官が2名、降りてくる。

警察官A「あなたが、通報された方ですか？」

山川「はい。山川と言います」

警察官A「何があったか、状況を説明して頂けますか？ 最初から」

山川「はい。夕方に配達する時に、この車を見つけたのですが…」

運転手が状況を説明する。

○牛崎市 市庁舎玄関（朝）

佐藤真が公用車で当庁してくる。

佐藤が公用車から降りて、玄関に向かう。マスコミが玄関で待ち構える。

歩いている佐藤にマイクやICレコーダーを向けながら、



後藤「市長！ 市長へのパワハラ告発文書を  
残して、行方不明になっている方がいると  
いう話は本当なのでしょうか？」

麦林「その告発文書に身の危険を感じると書  
いてあったとの情報もあります。市長が反  
社などに関わりがあるのではないのです  
か？」

立石「市長！ 一言お願いします！」

佐藤は、記者たちの方を向く。

佐藤「そのような事実があったことは承知し  
ています。ただ、反社などとの繋がりはあ  
りません」

佐藤「警察の捜査には全面的に協力致します」

○ワイドショー（以下、ワイドショー内）（昼）

宮原「次は、パワハラを告発された、牛崎市  
の佐藤市長の問題ですが、何か進展があっ  
たのでしょうか？ 取材している平木レポ  
ーターを呼んで見ましょう。平木さん？」

（市役所前）

フィクション劇場 第六話「矢面」

平木「はい。平木です。私は今、朝から牛崎市役所の前にいます。佐藤市長のパワハラ疑惑について、職員の方にお話を聞こうとしたのですが、みなさんうつむいて足早に市役所に入って行きました。市の広報にも問い合わせたのですが、コメントは差し控えるということです」

（ワイドショー）

宮原「警察からの情報はありますか？」

（市役所前）

平木「はい。警察では現場に乗り捨ててあった、告発者が乗っていたと思われるレンタカーの貸し出し履歴から、行方不明者の特定は出来ているとしています。ただ、告発文書に『身の危険を感じている』との文言があったことから、氏名を明らかにしていません」

（ワイドショー）

宮原「では、警察はこれからどのような対応をすることになるのでしょうか？」

（市役所前）

平木「警察では、付近の森林に隠れている可能性も考え、捜索隊を出すとともに、告発者に対しては警察に出頭し、保護を求めるよう呼びかけています」

（ワイドショー）

宮原「そうすると、この告発内容の真偽については、まだ分かっていないということですか？」

（市役所前）

平木「はい。少なくとも、今のところは分かっている状況です。ですが、警察への取材によると、告発内容に市の職員しか知り得ない情報があったとして、職員からの内部告発の可能性が高いと見えています」

（ワイドショー）

宮原「分かりました。では、この件に関しての、佐藤市長の記者会見などは予定されているのでしょうか？」

（市役所前）

平木「定例の会見が、明後日行われる予定で  
す。その際に何か言及があるものと思われ  
ます」

（ワイドショー）

宮原「ありがとうございます。引き続き取材  
をお願いします」

宮原「小田島さん、この件、どうお感じにな  
りますか？」

小田島「そうですね。告発文書の真偽のほど  
は分からないのですが、告発した方  
の『身の危険を感じる』というところが気  
になりますね。それほどの覚悟を持って今  
回の行動に出た訳ですから、私の感じでは  
信憑性はあるのではないかと思います」

宮原「そうですね。いずれにせよ、市長が記  
者会見でどのように説明されるのか、見守  
りたいと思います」

○記者会見場（昼）

舞台には演壇、後には『牛崎市』のよく

ある市松模様の看板。

司会「それでは、定例の記者会見を始めます。  
まず市長からお話頂き、その後、質疑応答  
を行います。それでは市長、ご登壇下さい」

佐藤が演壇に立つ。

佐藤が軽く礼をする。

佐藤「それでは、よろしくお願い致します」

佐藤「まず、ふるさと納税の返礼品につきま  
して、新たに品目を5品目追加すること  
を決めました。詳細はお手元の資料にありま  
すので、ご覧下さい」

各記者がイラっとする。

佐藤「次に、市職員へのカスタマーハラスメ  
ント対策についてですが……」

記者の後藤が市長の発言を遮る。

後藤「市長！ 今日私たちが聞きたいのは、  
カスハラの話ではなく、市長へのパワハラ  
疑惑についてです。それ以外の件は、後で  
資料を見ますから、その件に絞ってお話し  
下さい」

記者たちがざわつく。

佐藤「…分かりました」

佐藤「私へのパワハラを告発した文書の件につきましては、警察から市への協力要請があり、対応しました。結果として、市の職員が作成したものと認められるとのことでした。ですが、告発した職員の安全面に配慮し、お名前は差し控えさせて頂きます。私が把握している事実はそれだけです」

佐藤は司会者の方に目線で合図する。

司会「それでは、質疑に入らせて頂きます。ご質問のある方は、挙手をお願いします。私の方で指名しますので、所属とお名前をお話し頂いてから、ご質問下さい。では、どうぞ」

記者数名が手を挙げる。

司会「では、そちらの青のYシャツの方」  
麦林「毎朝新聞の麦林と申します。このパワハラ疑惑について、市長としてはパワハラがあったとの認識ですか？」

佐藤「まず、告発された職員の一刻も早い保護をお祈りします」

佐藤「ご質問の件ですが、私としましてはパウハラとの認識はありませんし、私のどういう行為がパウハラだったのかも分かりません。ただ、こういう事柄というのは、行為を受けた側の認識というのもあります。ですので、その告発した職員との認識合わせを行い、結論を出す形になるであろうと思います」

司会が当てる。

立石「大日本テレビの立石と申します。ただいま市長は『職員との認識合わせを行う』とおっしゃりましたが、その職員が現在、行方不明になっています。疑惑の結論を出すのは、その職員の所在が明らかになってからということですか？」

佐藤「みなさんにきちんとしたお話をするためには、そういうことになるかと思っています」

記者がざわつく。

司会が当てる。

大友「日刊アルプスの大友です。しかし、その職員がいつ保護されるか分かりませんし、『身の危険を感じて』いるということは、その職員が告発した内容は事実なのではないですか？」

佐藤「ですので、お話していますように、認識合わせが必要だということです」

司会が当てる。

藤野「共同プレス of 藤野です。職員が『身の危険を感じて』いるということは、市長が何かしらの圧力をかけているのではありませんか？」

佐藤「そういうことはありません。私が職員のみなさんに身の危険を感じさせるような圧力を掛けられる訳がありません」

司会が当てる。

日野「首都圏テレビの日野です。しかし、今日の朝、登庁して来る職員の方にインタビューしようとしても、どなたにも答えて頂



けません。本当に圧力をかけていないのですか？」

佐藤「他の職員のみなさんにも圧力をかけるような事はしておりません。いずれにせよ、当該職員の保護を待たないと、結論についてはお答え出来ません」

司会が当てる。

後藤「それでは、職員との認識合わせがなされて、市長がパワハラだと認められた場合は、その責任を取るおつもりがあるのですか？」

佐藤「おっしゃる通りです。とにかく、職員が早く保護されることを祈っています」

○新聞読者の自宅（昼）

テーブルの上に新聞を置いて読んでいる。

新聞読者「また、パワハラか…、最近多いなあ…」

○レンタカーが発見された周辺の山中（夕方）

警察が捜索していた時に、川の横に、職員  
員の靴が置いてある。

警官 A 「おい！ これは、例の職員の靴じゃないか？」

警官 B は川の方を見ながら、

警官 B 「その可能性が高そうだな……。しかし、場所が良くない。急いで鑑識を呼ぼう。あと、親族の方を呼んで靴の確認も」

警官 A 「了解しました」

○警察の記者会見場（その日の夜）

警察署長が長机に座っている。

長机にはマイク。記者多数。

カメラのフラッシュが焚かれる。

警察署長 「えー、行方不明となっている、牛崎市職員の捜索について、新たな事実が判明しましたので、お知らせします」

警察署長 「本日、午後4時頃、行方不明者が乗り捨てたと思われるレンタカーの場所か

フィクション劇場 第六話「矢面」

ら、東方向に500mほど入った森林の川岸にて、行方不明者のものと思われる靴を発見しました」

警察署長「これを受けまして、警察としましては、この事案が緊急性の高いものと判断し、ご家族のご了承の上、本案件を公開捜査とすることとしました」

警察署長「行方不明者の氏名は『飯山 光吉』さん、56歳。牛崎市市役所勤務。役職は企画部部长です」

警察署長「では、質問をどうぞ」

○牛崎市 市庁舎玄関（朝）

記者が群がっている。

佐藤が車で乗り付ける。

佐藤が車から降りる。

佐藤が市庁舎に入っていく。

後藤「市長！ 行方不明の飯山部長の靴が見つかったそうですね？」

麦林「河岸にあったそうじゃないですか！」

立石「市長、何かおっしゃって下さい！」

佐藤は記者の方を向く。

佐藤「その件は、警察からご連絡頂いて把握しています。記者会見の準備をしますので、ご連絡をお待ち下さい」

○記者会見場（昼）

司会「それでは、これより警察の捜査に対する市役所の対応について、記者会見を行います」

佐藤が説明する。

× × ×

司会「それでは、ご質問をどうぞ」

司会が記者を当てる。

後藤「市長のパワハラ疑惑の件ですが、告発した部長の靴が河岸で見つかった件はご承知でしょうか？」

佐藤「承知しています。今、警察の方で周辺の捜索をしていると聞いております。部長の一刻も早い保護をお祈りしておりますし、

私たちが協力できるところは全面的に協力していく所存です」

麦林が続けて、

麦林「これでも、パワハラ疑惑を否定されるのですか？」

佐藤「以前にもお話したように、飯山部長と認識合わせをして、結論を出すという考えに変わりはありません」

司会が立石を当てる。

立石「私どもの警察への取材から、状況として部長に最悪の事態が起きたことも考えられます。その場合は、どうされるおつもりですか？」

佐藤「そういう状況は考えたくありませんが、パワハラ疑惑については、まず、認識合わせを……」

大友が市長の発言を遮る。

大友「市長！ 人の命に関わることも知れないんですよ！ そんな呑気なことを言っていないでもいいのですか！」

藤野「そうです！　もしものことがあったら、  
どう責任を取られるおつもりなんですか!？」

佐藤「…」

日野「部長は『身の危険』とおっしゃって  
いますよね!?　認識のずれがあったとしても、  
そう思わせたのは市長ではないのですか!?  
その責任をどのようにお考えなのですか!？」

佐藤「ですから、先ほどからお話しています  
ように、まずは認識を合わせることが必要  
だと…」

日野「市長！　私たちは市長の認識ではなく、  
事実関係を聞いているんですよ!?　部長の  
告発文書が正しいかどうかということを！」

佐藤「…」

栗本「先ほどから市長は、何を他人事のよう  
におっしゃっているのですか!?　ご自身の  
職員の方が身の危険を感じてまでも、訴え  
ている話でしょう!?　当事者意識が無さす  
ぎですよ！」

横山一郎「裏で揉み消そうとしてるんじゃないな

いのか!? お前、反社の親分だろ！」

佐藤の表情が曇る。

佐藤「……」

記者会見の様子が続く。

× × ×

（別の日）

佐藤市長のぶら下がり取材。

多数のマイクを向けられなら話す。

記者は詰め寄る。

× × ×

（また別の日）

次の記者会見の様子になる。

佐藤市長が説明している。

記者が手を挙げて、立って市長を指差

し、オーバーアクションで質問してい

る。市長は少しやつれている。

× × ×

（またまた別の日）

再び、佐藤市長のぶらさがり取材。

市長の後ろからもICレコーダーが顔

の前に出される。市長はやつれている。

× × ×

再び、記者会見。市長はかなりやつれている。

○市長の公用車（夜）

佐藤は公用車に乗り込む。

佐藤「ふう…」

佐藤はネクタイを緩める。

運転手「市長…、大変ですね」

佐藤「ええ。はっきりしていないことが多いので。下手に否定をすれば、部長に迷惑がかかることになりかねませんから、慎重にならざるを得ないんです。こちらの言い分だけを記者のみなさんにお伝えしても…、と。その辺りをご理解頂きたいのですが…」

× × ×

佐藤の家の前に到着する。

運転手「お疲れさまでした」

佐藤「ありがとう、お疲れさま」



佐藤が車を降りるためにドアを開けた  
時に、車の外に倒れる。

佐藤「ううっ……」

運転手「市長、大丈夫ですか!? しっかりして下さい。市長!」

○記者会見場（翌日…昼）

司会「マスコミのみなさま、大変申し訳ございません。佐藤市長は体調が悪く、本日の会見は中止と致します」

後藤「ちょっと待って下さい。そんな急に言われても困ります。なぜ、もっと早く連絡をもらえなかったですか？」

司会「すいません、私どもが聞いたのも急でしたので……」

麦林「体調不良なら、診断書を見せて下さい。

あるんでしょう？」

司会「それは……、私どもも把握しておりませんので……。申し訳ありませんが……」

立石「何も分からないでは、こちら何も分

からないですよ。せめて最低限の説明をして下さい」

司会「申し訳ありませんが、こちらにも本当に何も分からないものですから……。それでは失礼します」

司会が退出する。

大友「……体調不良でドタキャンしておいて、診断書も出せないって……」

藤野「なんか……なあ」

日野「そうそう」

記者たちは渋い顔。

〇ワイドショー（昼）

宮原「……ということで、市長は体調不良で、会見をキャンセルとのことです。しかし、こう言っただけですが、ちょっと……。小田島さん、どう思われますか？」

小田島「市長の容態については、何とも言えないところではあるので失礼な言い方になってしまのですが……。よく、国会議員が

疑惑を追及されて、入院ってことがありますよね？」

宮原「ありますね」

小田島「あれも個人的には疑問に思うところはあるのですが、今回はそれに近い感じが……」

宮原「そうですね。それに今回は診断書が出せないというところが余計に……」

小田島「……はい、その辺りも気になりますね」

宮原「いずれにしましても新しい情報が入り次第、お伝え致します」

○市役所内の記者クラブ控室（数日後…昼）

控室に記者数名が待機している。

機材も運び込まれている。

秘書がノックして、ドアを開ける。

秘書「記者のみなさん、本日夜１０時から、市長が会見を開くことになりましたのでお知らせします」

後藤が立ち上がる。

後藤「夜１０時からですか？ 体調の問題で  
すか？ もう少し早くなりませんか？」

秘書「すいません。市長から、この時間でな  
いと都合が悪いとのこと。秘書の私も  
詳しいことは承知しておりません。ご容赦  
下さい」

後藤「市長は、必ず会見を開くと言ってるん  
ですよ？」

秘書「はい。必ず開くと申しております。そ  
れでは失礼します」

秘書が控室から去る。

麦林「…おい、いくら何でも…」

立石「でも、やるっていうんだから…」

藤野「診断書もまだ出てないし…」

日野が立ち上がる。

日野「いずれにせよ、出なきゃいけないこと  
には変わらないし。デスクに残業の申請を  
しておかないと」

記者たちは控室で準備を始める。

○記者会見場（夜）

演台と後の市松模様の壁がある。

司会「遅い時間にお集まり頂きありがとうございます。それでは、今から市長の記者会見を行います。市長の方は、まだ体調が思わしくないため、会見の時間は１０分とさせて頂きます」

記者がお互いに顔を見合わせて、ざわつく。

後藤「これだけ待って、たった１０分なのか？」  
麦林「まったく勝手過ぎるんじゃないか？」

会見場の外。

秘書が、市長を見下ろしている。

秘書「市長、よろしいのですか？」

佐藤（声）「構いません。お願いします」

会見場内。

司会「それでは、佐藤市長、お入り下さい」

演台が職員二人に持ち上げられて、向かって右に避けられる。

記者が、演題を目で追いながら不思議

そうに見ている。

左の扉から、ドクターが入ってくる。

その後に、看護師3人が動かすストレッチャーに乗って、点滴と酸素吸引器を付けた佐藤が現れる。

会場が静まり返る。

市長が、ドクターの方を向く。

市長「ドクター、お願いします」

田島（ドクター）「私は、佐藤市長の主治医を務めております田島と申します。市長の容態について、簡単に説明させていただきます」

田島「市長は5日前の夜、自宅前で社用車を降りようとした際に、倒れて私どもの病院に救急搬送されました。病名はストレス性の急性心不全です。容態は専門用語で申しますと、NYHA3から4、安静時は無症状ですが、いつ発作が起きてもおかしくない状態です」

記者たち「：」

田島「私は医者としての立場として、今回の記者会

見を開くことを控えるように強く助言しました。ですが、ご本人の意思が固く、私の付き添いと短時間を条件として、許可をいた次第です。以上でございます」

司会「それでは、時間が限られていますので、お早めにご質問の方、お願い致します」

シーンとなる会場。

後藤が手を挙げ、司会が当てる。

後藤「市長。なぜ、この時間に会見を設定したのですか？ それほど容態が悪いのでしたら、もっと早い時間に！」

佐藤「…田島先生は、外来も担当しておられます。どこも医師不足なんだそうです。付き添いが条件でしたので、外来が終わってから、ということ、この時間に設定させて頂きました」

司会が麦林を当てる。

麦林「診断書を開示頂けなかったのは、なぜでしょうか？ 容態が分かっていたら、私どもも配慮できたのですが…」

佐藤「：今、明らかにしてしまおうと、職員が動揺してしまうと考えまして。それに、私がこの状態だと分ければ、記者のみなさんは私以外の職員への取材に行くでしょう？ 市長の容体はどうなんだ、と。でしたら何も知らない方がいいと」

記者たち「：」

**司会が立石を当てる。**

立石「パワハラ疑惑について、再度市長のご見解をお願いします。あったのですか、なかったのですか？」

佐藤「今までお話して来ましたように、私自身としてそういう認識はありません。ですが、部長がそう感じられたのであれば、その責任は全て私にありますし、それを負うことに躊躇はありません」

司会「他にありますでしょうか？」

佐藤「横山さん：、何かありますか？」

横山「：」

司会「では、これで：」



佐藤が司会に手を挙げて言葉を制する。

佐藤「少しだけお話しさせて下さい」

佐藤「失礼な言い方かも知れませんが、みなさんは、私が悪人であることを前提として、それを裏付けるようなことばかり探していませんでしたか？ 私市長であるとは言え、人間です。ああしろ、こうしろと言いたくなる時もありますし、虫の居所が悪くて、つい強い口調になることもあります。もちろん、職員によって受け止め方は違いますから、そういう配慮を怠っていたと言われれば、その通りです」

記者たち「…」

佐藤「ただ、この件で、みなさんは職員や関係者の方に私について、どのように質問されたのですか？ 『何でもいいので、何かきついことを言われたことはないですか？』とか。どういう質問の仕方をしたのかを明らかにせず、結果だけが一人歩きしているのではないのですか？ それは、曲がりな

りにも事実だ、と言われればその通りですが……」

記者たち「……」

佐藤「パワハラ疑惑については、きちんと出るところに出て、説明を尽くして来たつもりです。それでもご納得頂けないのであれば、当然、身を引くことも考えますよ」

記者たち「……」

佐藤は一息おく。上を向いて、

佐藤「ところで……みなさんは、今日ここに何をしにいらしているのですか？」

佐藤「『取材』ですか……？」

記者たち「……」

佐藤「『取り調べ』ですか……？」

記者たち「……」

佐藤「それとも……、（顔を記者に向けて）『誰かの敵討ち』ですか……？」

記者たち「……」

佐藤「……私に、もしものがあつたら……、今度は……誰を責めるんでしょうね……」

会場は静まる。

司会「それでは、他にないようですので、本日の記者会見を終わります」

○ワイドショー（次の日の昼）

宮原「さて、佐藤市長のパワハラ疑惑ですけれども、昨日夜に、市長の会見が行われしました。市長が体調不良だということは聞いていましたが、予想以上に悪いようでしたね」

澤田「そうですね。ドクター同伴でしたから」

宮原「そういう状況で、ドクターから会見を控えるように助言があったらしいのですが、市長が「必ず会見を開く」とのことでしたので、私も取材を行いました」

宮原「ですので、今日は市長の容態に「最大限」配慮致しまして、会見の動画・音声は使わずに、ボードのみで会見内容を説明したいと思います」

○牛崎市の記者クラブ控室（昼）

後藤が電話で話をしている。

後藤「なんだって!？」

記者クラブにいる記者に向かって、

後藤「おい！ 例の部長が保護されたりし

い！ ウチの記者から連絡が入った！」

栗林「どこだ？」

後藤「病院に向かっているそうだ！」

○病院前（昼）

飯山が病院から出てくる。

記者が群がる。

飯山「今回は、関係各位に多大なるご心配とご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。誠に申し上げありませんでした」

飯山が頭を下げる。

後藤「部長！ 市長のパワハラは本当にあったのですか!？」

飯山「はい。あったと確信しています」

栗林「身の危険を感じたというのは、具体的

にどういうことだったのですか！」

後藤「市長に叱責されるのではないかということですよ」

飯山「では、なぜ私たちに対して会見しなかったんですか!? 隠れずに自分の意見をきちんと話せばよかったでしょう！」

立石「そうですね！ それで今、市長が大変なことになっていきますよ！ 責任についてどう考えなのですか!? 他に方法はなかったのですか!?!」

飯山「市長の件は、私も先ほど聞いたばかりですので、何とも申し上げられません」

日野「もし、市長の身に何かあったら、どう責任を取られるおつもりですか!?!」

飯山「それは、分かりません。このような状況になることは考えておりませんでしたので……」

藤野「この後、市長にお会いする予定はありますか!?!」

飯山「はい。そのつもりです」

藤野「謝罪されるんですよね!？」

飯山「…」

飯山は車に乗り込む。

○新聞読者の自宅（2ヶ月後…昼）

新聞を読んでいる。

新聞読者「今日もこの辺、以上なし、っと」

呼び鈴がなる。

新聞を開いたままテーブルに置いて、

インターホンに向かう。

新聞読者「はい、どなたですか？」

山川「お荷物です」

新聞読者「はい、伺います」

新聞読者がテーブルに新聞を広げたま

ま、荷物を取りに行く。

その新聞のおくやみ欄に佐藤市長が亡

くなったことが掲載されている。

（顔写真なし）

E  
N  
D

フィクション劇場 第六話「矢面」

(2025年8月1日 単話アップ)  
(2025年6月15日 初出)